

一三二 夫婦合同年祭2

これの小床を靈代に齋い定めて令坐奉り置き据え奉る天理教〇〇分教会
初代会長故△△△△刀自並びに二代会長故〇〇〇〇〇〇大人の御霊の御前
に天理教 分教会長 慎しみ敬い告げ白さく

今は早くも一年並びに五年の年うつり月代わりて五穀豊穰の秋深き今日
この頃となりしがかくて家族親族寄り集い 汝が刀自 汝が大人への面影を
浮かべ在せし世の事どもとりどり相語り合いて数々の尽せぬ思い出を御前
に繰り広げつ、今し御酒御食海川山野の種々の味物を捧げ奉りて茲に
一年並びに五年の靈祭 仕え奉る日となりぬ

今も尚現世に壮健に立ち働きて何処にか在すが如く思ほゆるも 矢張り
呼べどもその答はなく 戸の外に出でて見渡せど その御姿はあらず 誠
に云わぬ術 為す術なきも あの日の頃の功績を偲び奉りて 懐かしき
心些かも消えず この席に侍れるものみな古を慕う心いよいよ募るばかりなり

つらつらに顧み思えば 汝が刀自並びに汝が大人の現世に坐しける頃は
二人の男の子たちに恵まれ世の交際も疎かならず 家の業に一途につと
め勞かれ 家庭も常に円満に祖先の名を汚すことなく忠実に己が務を
重しみ仕え奉り その後打ち続く節に見舞われてよりは ひとすら親神の
御声にすがり 教祖ひながたを見つめ たすけ一条の日々を明け暮れされ
たり

旬来たりて遂に〇〇の名称の創立となり ささやかな教会なりしがその
初代並びに二代会長となり なつてもならいでもの真実に燃えて陽氣ぐらし
の道を辿られつ、ありしを 重き御病の憂瀨に沈み給いて〇〇〇〇〇〇大人は昭
和四十一年〇月〇日 齢七十才を以て △△刀自は昭和四十四年〇月〇
日六十八才を以て此の世を出直し坐しけるは誠に口惜しき限りなむ
こ、に靈祭を厳かに仕へ奉らくを甘らに安らに聞し食し 諾い給いて今ゆ
後これの席に列なる各もくの家毎を天翔り 国翔り 見守り給い 此の
教会につながる道の子始め子孫の八十連綿五十彊八桑枝の如く向榮に立
ち榮えしめ給えと 笑ましき姿を偲びつ、恐みくも白す